

不謹慎なタイトルではないかと一部からご批判があることを覚悟で、あえて書かせていただきます。会員のみなさんは、多くは会山行に参加して山を楽しんでいます、たまには単独行もいいし、単独行でこそ山の力がつくと確信しています。(ただ、岩や雪山は、十分な技術を習得した上でないと推奨はできないが・・・)

単独行で得られるものは二つあると思う。ひとつは、精神面。もう一つは“登山力”とでもいえようか。精神面で言えば、単独で山へ行っている場合、様々な人との出会いもあるが、登っているとき(歩いているとき)いろんなことを自然に何かを考える、考えるともなく考える。自分の心の中を見るということだ。仕事や職場のこと、家族のこと、仲間のこと、ほかの山のこと・・・目的を持って特別の内容を真剣に考えるというのではなく、人生全般と言えれば大げさになるが次々とわき出てくる。それが、自分の心の豊かさに繋がっている気がするということだ。

もう一つの“登山力”についていえば、当然であるが計画段階から自分自身がリーダーであり、山行当日は仲間がいない、すべて自分だけで対応することが求められるということだ。ルートと予想できる所要時間、難易度、危険箇所、小屋やエスケープルートがあるのかなどは一人で調べなければならないし、万が一のアクシデントにはどう対処するのか、精神的・装備的(ビバークなど)・技術的準備が必要である。難易度の高い山や近郊の山でも平日やマイナールートでは、ほかの登山者に出くわすとは限らない。道迷いや転滑落しない慎重さも必要だ。観察力や洞察力も求められる。何かあった場合、仲間がいる登山ではないのだ。

私は労山に入会するまでは、いわゆる未組織のハイカーから一登山者に過ぎなかった。現役で仕事中は、土日もいろいろあって滅多に山に行けないし、帰宅も遅かった。それでもたまに単独で気晴らしに登山していた。山道具をザックにつめて出勤し、大阪から夜行バスで北アルプスにも行った。単独行ゆえに山陰の大山の下山ではショートカットのつもりが道迷いをしたり、西穂から奥穂へは雨で引き返したり、ジャングル近くで落石にひやひやししながらテントビバークしたりもした。お粗末ながら犬鳴山の低山でも少し迷ったこともあるし、涸沢では雷で、どこにも登らずに帰阪したこともあった。人間は簡単に死ぬこともあるが、どっこい簡単には死なない。運もあるかもしれないが、様々な条件に活かされていると思うし、生きるための術がある。その後、登攀や雪山技術を身につけるためには個人では限界があり、労山に入会した。多くの仲間と巡り会い、自分が習得したのはたいした山技術といえるほどではないが、先輩のみなさんからたくさんことを学ばせていただいた。

若い会員のみなさんには、会山行とともにたまには単独行をすることをおすすめしたい。加藤文太郎や松濤明はこよなく単独行を愛したが、ふたりとも友を放っておけないとして北鎌尾根で自分も遭難した。足がじわじわと凍ってくると書いた松濤明の『風雪のヴィバーク』は壮絶だ。二人とも、単独では生還していたと思う。

白馬と杵池で、この夏から秋に単独行(冬山とバックカントリーと思われる)の二人の白骨遺体が発見された。いずれも情報が不十分で、搜索願が出されていた。最近、長能県警はYouTubeで救助にかかわった映像などをアップしているが、その中に今年5月の「北アルプス白馬岳における単独滑落遭難」がある。残雪期の単独遭難救助の様子を撮影し、終わりになぜ救助できたかを書いている。登山者への啓発である。

最近、個人的に思っていることは、岩や雪といった「アルピニズム」が消えつつあるのではないだろうかということだ。簡単な山行、「楽しい山行」が増えて、チャレンジする山行が一部の山屋に偏っていないだろうか。全国的に会員の高齢化と若い会員が増えない中で、私が感覚的に受け取っているだけで具体的根拠はない。

ここ数年、ソロテントがよく売れているし、30~40歳代くらいの登山者によく出会うが多人数のパーティではない。カップルであったり、単独行もある。テンパでは4テンも多くはない。女性の単独行、しかもテント泊の登山者にも遭遇する。『PEAKS』という登山雑誌がひとつの傾向をつくっている感じだ。この流れをどう見るか。我々は、先を読まなければならない。(泉州労山機関紙への寄稿を一部修正したものです)